

科目名	基礎看護学実習 I	時期	1年次 後期
担当者	看護師として5年以上の実務経験を有する専任教員	単位(時間)、日数	1単位(35時間)、6日間
科目の概要	本実習で、看護学生として初めて看護の対象と看護活動の実際場に臨む。既習の基本的な看護の概念・看護の対象・看護理論(ナイチンゲール・ヘンダーソン)の視点をもって、実際の看護活動や看護の対象者の状況に触れ関連した理解を深める。あわせて、実習での看護学生としての基本的な姿勢を学び、これから学ぶ看護の内容への意味を探究する力も養う。		
目的	健康障害を持つ人を理解し、状態に応じた看護を実践するための基礎的な知識、技術、態度を修得する		

I 実習目標・行動目標

実習目標	行動目標
1 入院生活を送る対象の思いや体験していることに関心をむけ、コミュニケーションを図り、基本的ニーズを理解する	1) 入院生活を送る対象の思いを説明する 2) 入院生活を送る対象の体験していることを説明する 3) 入院生活を送る対象の基本的ニーズをヘンダーソンの理論を用いて説明する 4) 入院生活を送る対象を尊重した態度、言葉で対応する 5) 入院生活を送る対象に関心を寄せ主体的に関わる 6) 入院生活を送る対象の立場や状況を考慮して話しやすい環境を整える
2 対象の入院している環境を理解する	1) 対象の入院している病床環境を具体的に説明する 2) 対象の入院している環境をナイチンゲールの理論を用いて説明する
3 病棟での看護活動を見学し、看護がどのように実践されているかを理解する	1) 看護師が入院している対象をどのように観察し状態を把握しているのか学びを述べる 2) 看護師と入院している対象との関りからコミュニケーションにおける学びを述べる 3) 看護師が行う入院している対象への看護から、対象にとっての安全への配慮面の学びを述べる 4) 看護師が行う入院している対象への看護から、対象にとっての安楽への配慮面の学びを述べる 5) 看護師が行う入院している対象への看護から、対象の個別に応じた配慮面の学びを述べる 6) 看護師の役割と看護の魅力について自分の考えを述べる
4 看護を学ぶ学習者として主体的に学ぶ姿勢・態度を修得する	1) 実習中に知り得た患者・家族及び医療者の情報などに関する守秘義務を遵守する 2) 自ら必要に応じて適切に報告・連絡・相談する 3) 看護職として自覚を持ち、約束やルールを守る
5 実習を通し看護の魅力について、学んだことを振り返り、自己の課題を明らかにする	1) 看護活動の実際から「看護の対象と看護活動の実際を理解したうえで考える看護で大切なこと」を述べる 2) 実習全体を通して主体的に学習し、自己の課題を明確にできる

II 実習構成

実習場所	実習時間(日数)	実習内容
学内	2 H	オリエンテーション
	4.5 H	事前研修
	2.5 H	実習のまとめ：全体カンファレンス
県立新発田病院(病棟)	26 H(4日)	治癒および回復が困難な対象とその家族の看護

III 実習評価

実習評価表に基づき評価する

科目名	基礎看護学実習Ⅱ	時期	2年次 前期
担当者	看護師として5年以上の実務経験を有する専任教員	単位(時間)、日数	1単位(35時間)、6日間
科目の概要	本実習では、基礎看護学実習Ⅰで習得した内容に加えて、臨床場面において、健康障害をもつ対象の理解を広げ、基本的な看護技術の援助を実践する。学生は、受け持ち患者の生活行動・機能の視点での範囲において、主体的に情報収集をすすめる。さらに患者の健康障害について、基本的な疾患の理解と現状で行われている範囲での検査・治療・看護について学び、これらの情報の範囲でアセスメントをする。基本的な看護の援助計画を立案し、看護師(教員も含む)の判断・見守りのもと実施し、評価する。実習を通して、今後の看護を実践する意義や魅力を探求する力を養う。		
目的	健康障害を持つ人を理解し、状態に応じた看護を実践するための「基礎的な知識、技術、態度を修得する。		

I 実習目標・行動目標

実習目標	行動目標
1 対象の疾患と受けている検査や治療と看護について理解する	1) 受け持ち患者の疾患、病態、現在の症状について情報収集し記述する 2) 受け持ち患者に行われている治療、検査について情報収集し記述する 3) 疾患、病態、症状、検査、治療が対象の日常生活にどのように影響をあたえているか記述する
2 生活行動・機能の視点に沿って対象の状態をアセスメントする	1) 対象の生活行動の分析に必要な情報を収集する 2) 対象のバイタルサインの値を分析する 3) 対象の療養環境の情報を分析し、援助の必要性を判断する 4) 対象の栄養・代謝に関する情報を分析し、援助の必要性を判断する 5) 対象の排泄に関する情報を分析し、援助の必要性を判断する 6) 活動・運動に関する情報を分析し、援助の必要性を判断する 7) 睡眠・休息に関する情報を分析し、援助の必要性を判断する 8) 対象の個別の状態に応じ、日常生活援助の留意点を記述する 9) 対象の安全・安楽の視点から、日常生活援助の留意点を記述する
3 対象の状態に合わせた日常生活援助を看護師と共に実施する	1) 計画した援助を看護師または教員と安全・安楽に実施する 2) 計画した援助を、「看護技術を支える構成要素」に沿って看護師または教員と実施する 3) 計画した援助を準備から後片付けまで責任を持ち実施する 4) 計画した援助を患者の反応をふまえて振り返る 5) 日々の実践を患者の反応をふまえて振り返る 6) 日々の実践内容を看護師に報告する
4 看護における疑問や問題に気づき、グループメンバーと協力しながら、その解決に向けて積極的に取り組める	1) 対象に関心を向け対象を理解するため、看護学生としてふさわしい身だしなみ・態度・言葉づかいで他者と関わる 2) 対象の反応を観察し、言動や言動以外で表現していることにも関心を向けたコミュニケーションを行う 3) グループメンバーの意見を尊重しながら、自分の考えを述べる 4) 疑問なことは自己学習し、その内容を実習にいかせる 5) 実習中に知り得た患者・家族及び医療者の情報等に関して守秘義務を守る 6) 「患者の日常生活を支援する意義」について、文献を活用し自己の考えを記述する 7) 一連の実習をともし学んだことから、自己の課題を見出し記述する

II 実習構成

実習場所	実習時間(日数)	実習内容
学内	6.5H(1日)	オリエンテーション、事前研修
県立新発田病院(病棟)	26H(4日)	1事例を受け持ち、患者の状態に応じた日常生活援助を実践する
学内	2.5H(1日)	まとめ

III 実習評価

実習評価表に基づき評価する

科目名	基礎看護学実習Ⅲ	時期	2年次 後期
担当者	看護師として5年以上の実務経験を有する専任教員	単位(時間)、日数	2単位(70時間)、11日間
目的	健康障害を持つ人を理解し、状態に応じた看護を実践するための「基礎的な知識、技術、態度を修得する。		
科目の概要	本実習では基礎看護学実習Ⅰ 基礎看護学実習Ⅱで修得した実習の基本となる内容に加えて、看護過程の思考をもって実際に看護展開を実施する。受け持ち患者の情報収集、アセスメント、全体像の把握、看護問題の明確化、看護計画の立案、援助の実践、看護目標の評価まで、助言を受けながら主体的に進める。看護実践の基礎となる本実習を通して、看護に対する価値を見出し、自己の課題を明確にし、を探究する力を養う。		

I 実習目標・行動目標

実習目標	行動目標
1 患者との信頼関係構築にむけた行動を実践する	1) 患者に深い関心を持ちあるがままの患者を受け止めようとする態度で接する 2) 患者の状況・状態に応じた効果的なコミュニケーション技法を用いている
2 患者の理解に必要な情報を収集し、分析・解釈を行い、患者の全体像を理解する	1) 患者の全体像を理解するために必要な情報を、適した方法で収集し説明する 2) 得られた情報を関連づけながら患者の病態を分析・解釈する 3) ゴードンの機能的健康パターンの中核を組み用いて情報を収集し体系的に分類する 4) 患者の健康障害が生活行動へ及ぼす影響について、得られた情報を関連づけながら分析・解釈する 5) 患者の健康障害が心理・社会面へ及ぼす影響について、得られた情報を関連づけながら分析・解釈する 6) 分析・解釈した内容を全体像として図式化する 7) 図式化した情報から患者の全体を把握し、看護の方向性を記述する
3 患者に生じている看護問題を明確化し、患者の個性に応じた看護計画を立案する	1) 患者に生じている看護問題に関連する事柄を、関連因子、危険因子、症状・徴候の情報を関連させて分析する 2) 看護問題に関連する事柄の分析から成り行きを考え、看護問題を明確化できる 3) 長期目標と短期目標を評価可能な行動レベルで設定する 4) 看護計画は、具体的に実践可能な表現で記述する(5W1H) 5) 患者の状態に応じた個別化看護計画を立案する 6) 看護計画の具体策に対し、個別に応じた根拠を説明する
4 看護計画を患者の状況・状態に応じた方法で実践し、評価する	1) 実施する援助について患者の理解状況に合わせた方法で説明する 2) 患者の状況・状態に応じた安全・安楽を考慮し実践する 3) 患者の個性を考慮し、創意工夫し実践する 4) 患者のプライバシーに配慮して実践する 5) 日々の看護実践を、患者の反応や援助結果から振り返る 6) 日々の振り返りから、患者の状況・状態に合わせて看護計画を追加・修正する 7) 設定した看護目標の到達について根拠をもって評価する
5 看護を学ぶ学習者として主体的に学ぶ姿勢を身につける	1) 看護職としての守秘義務を遵守する 2) 看護の提供者として必要な知識・技術を主体的に学修する 3) 自ら必要に応じて、報告・連絡・相談する
6 実習を通して学んだことを振り返り自己の課題を明らかにする	1) 実習を通して学んだことについて、自らの体験をふまえて参考・引用文献を用いて考察し記載する 2) 実習全体を振り返り、自己の今後の課題を明確にし記述する

II 実習構成

実習場所	実習時間(日数)	実習内容
学内	6.5H(1日)	オリエンテーション、事前研修
県立新発田病院(病棟)	58.5H(9日)	1事例を受け持ち、看護過程を展開する
学内	5H(1日)	まとめ

III 実習評価

実習評価表に基づき評価する

科目名	地域・在宅看護論実習	時期	3年次 前期・後期
担当者	看護師として5年以上の実務経験を有する専任教員	単位(時間)、日数	2単位(70時間)、11日間
科目の概要	地域で暮らす看護の対象の多様性・複雑性を理解し、地域包括ケアシステムにおける地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、訪問看護ステーションの機能と役割の実際から住み慣れた地域で療養を継続するための医療・介護・福祉チームの連携と看護の役割について学ぶ。		
目的	地域で暮らす看護の対象を理解し、地域・在宅看護を実践するために必要な知識・技術・態度を修得する。		

I 実習目標・行動目標

実習目標	行動目標
1 地域で暮らす人が抱える課題と地域包括支援センターの機能と役割の実際を理解する	1) 地域包括ケアシステムにおける地域包括支援センターの機能と役割の実際を説明する 2) 地域包括支援センターを利用する対象の特徴と生活上の課題に対する社会資源の活用を説明する
2 居宅介護支援事業所を利用する対象が抱える課題とケアマネジメントの実際を理解する	1) 地域包括ケアシステムにおける居宅介護支援事業所の機能と役割の実際を説明する 2) 居宅介護支援事業所を利用する要介護者と家族の生活上の課題に対する社会資源の活用を説明する
3 訪問看護ステーションを利用する対象が抱える課題と在宅療養を支える看護の実際を理解する	1) 訪問看護を利用する療養者・家族の心身機能の特徴を説明する 2) 訪問看護を利用する療養者・家族の生活環境の実際を説明する 3) 訪問看護を利用する療養者・家族の社会資源の活用を説明する 4) 療養者・家族の生活に影響を及ぼす看護上の問題を分析する 5) 在宅における看護目標の設定理由を説明する 6) 在宅における看護計画の内容の意味を説明する 7) 療養者・家族を主体とした在宅看護の実際について説明する 8) 療養者・家族を一単位とした在宅看護の実際について説明する 9) 療養者・家族のセルフマネジメントを支える在宅看護の実際について説明する 10) 在宅看護におけるリスクマネジメントの実際について説明する
4 地域包括ケアシステムにおける医療・介護・福祉チームの連携と看護の役割を考察する	1) 地域包括ケアシステムにおける訪問看護ステーションの機能と役割の実際について説明する 2) 地域包括支援センターにおける医療・介護・福祉チームの連携の実際を説明する 3) 居宅介護支援事業所と医療・介護・福祉チームの連携の実際を説明する 4) 訪問看護ステーションと医療・介護・福祉チームの連携の実際を説明する 5) 地域包括ケアシステムを推進する上でのチームにおける看護の役割について説明する 6) 訪問看護の特性から地域・在宅看護に求められる役割について考察する 7) 地域・在宅看護の現状と今後の課題について考察する
5 地域・在宅看護を実践するために必要な倫理観と基本的な技術・態度を身につける	1) 地域・在宅看護の対象の特徴を踏まえてコミュニケーションを実践する 2) 地域・在宅看護を実践するために必要な学習を行い、技術を修得する機会を主体的に求める 3) 地域・在宅看護を実践する看護職としてふさわしい倫理観を持ち、行動・態度に示す

II 実習構成

実習場所	実習時間(日数)	実習内容
学内	5H(1日)	オリエンテーション
地域包括支援センター	6.5H(1日)	地域包括支援センターで働く専門職に同行する
居宅介護支援事業所	6.5H(1日)	ケアマネージャーに同行し、利用者宅へ訪問する
訪問看護ステーション	45.5H(7日)	訪問看護所に同行し、利用者宅へ訪問する
学内	6.5H(1日)	まとめ

III 実習評価

実習評価表に基づき評価する

科目名	成人・老年看護学実習 I	時期	2年次 後期
担当者	看護師として5年以上の実務経験を有する専任教員	単位(時間)、日数	2単位(70時間)、11日間
実習概要	回復期・慢性期にある成人期または老年期の対象の健康レベルとライフサイクルからみた成人期・老年期の発達段階を理解し、看護過程の展開を通して対象とその家族への看護を実践し、必要な能力を養い、回復期・慢性期看護のあり方を学ぶ。 健康障害を受容し、セルフケア能力獲得に向けた支援と健康の維持・増進と対象を支えるための保健・医療・福祉の役割とチーム体制を理解する。		
目的	回復期・慢性期にある成人期または老年期の対象とその家族を理解し、セルフケア・セルフマネジメントの獲得を促す看護を実践するための知識・技術・態度を修得する。		

I 実習目標・行動目標

実習目標	行動目標
1 回復期・慢性期にある対象への支援の特徴を理解し、セルフケア・セルフマネジメントの状況をアセスメントし、対象の全体像を把握し、看護上の問題を明確化する	1) 対象の病態情報を収集し要約してアセスメントする 2) ゴードンの機能的健康パターンの枠組みを用いて情報を体系的に分類する 3) 成人・老年各期の身体機能・心理社会的機能をふまえ対象の状況をアセスメントする 4) 対象の病態と身体機能・心理社会的機能をふまえ、対象の状況をアセスメントする 5) 対象の病態や健康障害、生活や心理社会文化的影響について情報を関連付けながら統合して全体像を説明する 6) 慢性期・回復期にある対象の実在型、リスク型問題を明確化する
2 セルフケア・セルフマネジメントや自分らしい生活、対象や家族にとってのセルフケア・セルフマネジメントを支援する看護計画を立案する	1) 根拠をもって健康問題の優先順位を決定する 2) 対象の意見や希望を考慮しながら、対象に応じた長期目標と短期目標を設定し説明する 3) 対象の意見や希望を考慮しながら、根拠に基づいた個別かつ具体的な看護計画を立案する
3 計画した看護援助を対象の状況に合わせて実施し、客観的かつ対象の立場の視点で評価する	1) 実施する看護について対象に合わせた説明をする 2) 対象の反応に合わせて、安全、安楽、個別性を考えながら計画に基づいて実施する 3) 対象・家族の話をよく聞き、理解すると共に、自分の考えや思いを相手に分かるように伝える 4) 対象やその家族の自己効力感に着目し、意欲を引き出す関わりを実施する 5) 対象の入院中および退院後における生活の再構築に向けた援助を、セルフケア・セルフマネジメント理論による根拠に基づき実施する 6) 日々設定した看護目標や計画、実施が対象にとって最良の状態であるかを客観的に評価し必要に応じて計画を追加・修正する 7) 一連の実践を通して要約し、看護目標の評価、介入の妥当性について根拠をふまえて客観的に振り返る 8) 対象への安全・安楽・倫理に配慮した看護実践に向けた知識・技術・態度を修得する機会を求める
4 対象と家族がセルフケア・セルフマネジメントにより自分らしい生活を実現するための看護の価値を考察する	1) 看護実践場面をもとに、セルフケア・セルフマネジメントによる自分らしい生活に向けた看護で大切なことについて自己の考えを示す 2) 疾病や障害を持ちながら生きる人やその家族の思い、生活を支えるための看護師の役割について自己の考えを示す
5 看護専門職としてふさわしい態度を身につける	1) 看護師を主とする医療スタッフや教員と報告・連絡・相談する 2) 主体的に実習に臨み学習をすすめる 3) 対象や病院内の出来事に対し守秘義務を遵守する 4) 実習グループ内でのカンファレンス時に自己の意見が述べられ、メンバーと意見の共有をする。 5) 対象や家族に関心・思いやり、それを表現する

	6) 対象や医療スタッフへの影響や不利益を考慮し、看護職としてふさわしい行動・態度で実習に臨む
--	---

II 実習構成

実習場所	実習時間(日数)	実習内容
学内	5H(1日)	オリエンテーション
県立新発田病院(病棟) 県立リウマチセンター(病棟)	65H(10日)	1事例を受け持ち、看護過程を展開する

III 実習評価

実習評価表に基づき評価する

科目名	成人・老年看護学実習Ⅱ	時期	3年次 前期・後期
担当者	看護師として5年以上の実務経験を有する専任教員	単位(時間)、日数	2単位(70時間)、11日間
実習概要	周手術期や生命の危機状態にある対象の健康レベルとライフサイクルからみた成人期・老年期の発達段階を理解し、対象とその家族における看護過程の展開を通して、看護実践に必要な能力を養い、急性期看護のあり方を学ぶ。受け持ち患者の手術見学および集中治療室ICU・CCUでの見学実習を通して急性期における看護実践方法・役割、チーム医療について考えを深める。		
目的	急性期にある対象とその家族を理解し、生命維持・健康回復への看護を実践するための知識・技術・態度を修得する		

I 実習目標・行動目標

実習目標	行動目標
1 周手術期にある対象への支援の特徴を理解し、術前・術中・術後の生体反応や合併症予防、日常生活の自立/自律の状況をアセスメントし、対象の全体像を把握し、看護上の問題を明確化する。	1) 周手術期にある対象の病態情報を収集し要約してアセスメントする 2) ゴードンの機能的健康パターンの枠組みを用いて情報を体系的に分類する 3) 成人・老年各期の身体機能・心理社会的機能をふまえて対象の状況をアセスメントする 4) 周手術期の病態と心理社会的機能をふまえて、対象の状況をアセスメントする 5) 周手術期の病態や健康障害、生活や心理社会文化的影響について情報を関連付けながら統合して全体像を説明する 6) 周手術期にある対象の実在型、リスク型問題を明確化する
2 術前・術中・術後の合併症予防や日常生活の自立/自律を支援する看護計画を立案する	1) 根拠をもって健康問題の優先順位を決定する 2) 対象の意見や希望を考慮しながら、対象に応じた長期目標と短期目標を設定し説明する 3) 対象の意見や希望を考慮しながら、根拠に基づいた個別かつ具体的な看護計画を立案する
3 計画した看護援助を対象の状況に合わせて実施し、客観的かつ対象の立場の視点で評価する	1) 実施する看護計画について対象に合わせた説明をする 2) 対象が心身ともに最良の状態です術を受けられるように援助を実施する 3) 術中の状態変化をふまえて、術後の適切な観察を実施する 4) 離床に伴う不安・苦痛に共感しながら、術後の合併症を予測し予防するための援助を実施する 5) 対象にとって自立・自立した退院後の生活の再構築を目指し、セルフケア・セルフマネジメントに応じた援助を実施する 6) 日々設定した看護目標や計画、実施が対象にとって最良の状態であるか客観的に評価し必要に応じて計画を追加修正する 7) 一連の看護実践を要約し、看護目標の評価、介入の妥当性について根拠をふまえて振り返る 8) 対象への安全・安楽・倫理に配慮した看護実践に向けた知識・技術・態度を修得する機会を求める
4 手術を受ける対象・家族が健康回復に向かうための看護の価値を考察する	1) 具体的な看護実践場面を通して、手術を受ける対象・家族が健康回復に向かうための看護で大切なことについて自己の考えを示す 2) 対象の手術による心身の状態変化や合併症予防、日常生活の自立/自律に向けた回復過程における看護師の役割について自己の考えを示す
5 救命救急センターの機能と役割、急性期の状態にある対象および家族への看護を理解する	1) 急性期における看護実践の根拠や看護上の留意点、倫理的配慮を説明する 2) 救命センターの機能と役割、急性期の状態にある対象および家族への看護に対する自己の考えを示す
6 看護専門職としてふさわしい態度を身につける	1) 看護師を主とする医療スタッフや教員へ報告・相談、学生間で実習が円滑に進むための情報共有や連絡をしている 2) 主体的に実習に臨み学習をすすめている 3) 対象や医療スタッフへの影響や不利益を考慮し、看護職としてふさわしい行動・態度で実習に臨む

II 実習構成

実習場所	実習時間(日数)	実習内容
学内	5H(1日)	オリエンテーション
県立新発田病院(病棟・手術室)	58.5H(9日)	1事例を受け持ち、看護過程を展開する 受け持ち患者の手術を見学実習する
県立新発田病院(集中治療室ICU・CCU)	6.5H(1日)	見学実習

III 実習評価

実習評価表に基づき評価する

科目名	成人・老年看護学実習Ⅲ	時期	3年次 前期・後期
担当者	看護師として5年以上の実務経験を有する専任教員	単位(時間)、日数	2単位(70時間)、11日間
科目の概要	人生の最終段階にある対象とその家族を身体的、精神的、社会的、霊的(スピリチュアル)、文化的側面から総合的にとらえ看護過程の展開を通して対象のQOL向上にむけた看護を学ぶ。対象とその家族のライフスタイルと生活環境を踏まえたその人らしい生活のあり方を考え、終末期にある対象とその家族への看護師の役割・機能を考える。		
目的	治癒及び回復が困難な対象とその家族を理解し、その人らしい生活を全うできるような看護を実践するための知識・技術・態度を修得する。		

I 実習目標・行動目標

実習目標	行動目標
1 成人期・老年期の終末期にある対象と家族を理解する	1) 終末期にある成人期・老年期の対象の発達段階や病状の理解に関する情報を収集する 2) 対象の身体的・心理的・社会的・霊的(スピリチュアル)、文化的側面から情報収集し説明する 3) これまでのライフスタイルと生活環境をふまえ、その人らしい生活のあり方を説明する
2 終末期にある対象の健康問題を理解する	1) 対象に生じている器質的変化・機能的変化、症状を、解剖生理、病態生理、機能障害のメカニズムの知識に基づき説明する 2) 対象への検査・治療・処置の目的とそれが身体的・心理的側面に及ぼす影響について説明する 3) 健康障害や治療が対象の日常生活の及ぼす影響について説明する 4) 対象が、疾病や治療による状態の変化と影響をどのように受け止め対処しているか説明する 5) 予測される機能変化や合併症とその対応について説明する 6) 対象の身体・生活・心理・スピリチュアル・社会・文化的視点、全人的苦痛の視点からの情報を系統的に関連付け、統合的に分析・解釈する 7) 系統的に分析・解釈した内容から全体像を説明する 8) アセスメントの内容から対象の看護問題その人らしさ、QOL、安楽、全人的苦痛の観点から決定する
3 終末期にある対象の健康状態に応じた看護を実践する	1) 健康問題の根拠を原因・誘因、成り行きから分析し看護の方向性を決定する 2) QOLの考えに基づき対象やその家族の選択権、自己決定権を尊重し実現可能な目標を対象や家族とともに共有する 3) 対象の身体・生活・心理・社会・文化的特徴と科学的根拠に基づいた個別的な看護計画を立案する 4) 日々対象の症状・反応の変化を観察しながら、個別的で安全・安楽・自立に配慮した援助を実施する 5) 対象や対象の家族の全人的苦痛を最小限にするために安楽に向けた援助を実施する 6) 対象の希望を考慮した上で、状態の変化を把握し必要に応じて方法の変更や中止を検討する 7) 日々設定した目標や計画、実施が対象にとって最良の状態であるかどうかを評価し修正する 8) 実施した援助を客観的に見つけ、根拠をふまえ批判的かつ論理的に吟味して根拠に基づき看護計画を評価する
4 看護として多職種と連携・協働する必要性を理解する	1) 終末期にある対象に応じた多職種協働によるチームアプローチの必要性を説明する 2) 対象と家族に応じた療養の場への移行に伴う必要な援助を説明する 3) 保健・医療・福祉チームの一員として看護の役割のわかり自己の考えを述べる
5 対象への看護実践を通して、看護に対する価値を見出す	1) 対象の看護を通して「生と死」について自己の考えを述べる 2) 対象の看護実践場面をもとに対象の安楽に向けた看護で大切なことについて文献を用いて自己の考えを述べる
6 看護専門職としてふさわしい態度を身につける	1) 主体的に実習に臨み周囲への影響を考慮した対応をする(身だしなみ、言葉遣い、挨拶、約束・ルールを守る、自己の心身の健康管理など) 2) 対象や家族の尊厳を守り擁護的立場で行動し誠実な対応をする 3) 必要に応じて、学生間・医療スタッフ・教員と情報共有・意見交換・報告・連絡・相談を適切に行う

II 実習構成

実習場所	実習時間(日数)	実習内容
学内	5H (1日)	オリエンテーション
県立新発田病院(病棟)	65H (10日)	治癒および回復が困難な対象とその家族の看護

III 実習評価

実習評価表に基づき評価する

科目名	老年看護学実習	時期	3年次 前期・後期
担当者	看護師として5年以上の実務経験を有する専任教員	単位(時間)、日数	2単位(70時間)、11日間
科目の概要	老年期における対象の生活史や生きてきた時代背景に興味・関心を持ち、多様性・価値観を尊重したコミュニケーションを学ぶ。高齢者を生活者として捉え、生活機能の観点から看護過程を展開する。また、加齢変化と疾患により、その人らしい生活を妨げる健康問題と対象の“もてる力”を理解し、健康逸脱から回復促進、QOL維持・向上にむけた看護を学ぶ。高齢者と家族を取り巻く環境を理解し、多様な生活の場を支えるための保健・医療・福祉の役割とチーム体制を学ぶ。		
目的	老年期にある対象者とその家族を理解し、多様な生活・療養の場に向けた看護の基礎となる知識・技術・態度を修得する		

I 実習目標・行動目標

実習目標	行動目標
1 老年期にある対象の特徴を捉え、その人らしい生活を送る上での健康問題と“もてる力”を理解する	<ol style="list-style-type: none"> 1) 対象のこれまでの生活環境・生活行動についての情報を収集する 2) 老年期の特徴と疾患・入院・治療を捉え、身体的・心理的・社会的側面から情報を収集する 3) 入院に伴いその人らしい生活を妨げる要因を身体的・心理的・社会的側面から分析する 4) 対象の健康逸脱から回復促進に向けたもてる力を分析する 5) 老年期にある対象を生活者として捉え、その人らしい生活のあり方を分析する 6) 老年期にある対象のその人らしい生活に影響を与える原因・誘因を分析し、健康問題で説明する
2 老年期にある対象の生活機能に着目し、その人らしい生活に向けた看護計画を立案、評価する	<ol style="list-style-type: none"> 1) その人らしい生活に影響を及ぼす看護問題の優先度を生活機能の観点から決定する 2) 看護問題と根拠、成り行きを説明し、実現可能な看護目標を設定する 3) 対象のもてる力を活かした根拠のある看護計画を立案する 4) 対象の特徴と反応を踏まえ、実施する看護の根拠・目的・方法について説明する 5) 対象の健康状態を把握し、必要に応じて援助の変更や中止を検討する 6) 対象の反応から実践した看護を振り返り、必要に合わせて看護計画を追加・修正する 7) 対象のその人らしい生活と生活機能を踏まえた一連の看護実践を要約し、看護目標の評価、介入の妥当性について根拠を踏まえて総合的に評価する
3 老年期にある対象の“もてる力”を活かし、対象の状態に応じた援助を実践する	<ol style="list-style-type: none"> 1) 対象の生活史や生きてきた時代背景を踏まえ、人格・尊厳・価値観を尊重したコミュニケーションを実践する 2) 対象のその人らしい生活やQOLの維持・向上を踏まえた看護を実践する 3) 対象のもてる力、自立の視点で援助を実践する 4) 対象の健康状態・状況に合わせて安全・安楽に留意した援助方法を選択し、対象の反応を捉えながら実践する
4 老年期にある対象の生活を支えるための保健・医療・福祉システムとチーム体制を理解する	<ol style="list-style-type: none"> 1) 介護老人福祉施設の利用者のケア環境と施設における看護の役割、多職種連携・協働について説明する 2) 退院支援における多職種連携・協働と看護の役割について説明する
5 老年期にある対象に実践した援助を振り返り、老年看護の価値を考察する	<ol style="list-style-type: none"> 1) 生活機能に着目して実践した看護を振り返り、その人らしい生活に向けた看護について自己の考えを述べる 2) カンファレンスで自分の意見が述べられ、グループメンバーとの意見の共有ができる
6 看護専門職としてふさわしい態度を身につける	<ol style="list-style-type: none"> 1) 対象者の援助に必要な知識・技術・態度を修得するための機会を積極的に求める 2) 看護職者としてふさわしい態度・行動を示す 3) 自身の健康管理を行い、チームの一員として行動する

II 実習構成

実習場所	実習時間(日数)	実習内容
学内	5H(1日)	オリエンテーション
県立新発田病院(病棟) 県立リウマチセンター(病棟)	52H(8日)	老年期にある対象を受け持ち看護過程を展開する
特別養護老人ホーム	13H(2日)	施設で生活する高齢者の看護の実際を見学する 地域で生活しデイサービスを利用する高齢者の看護の実際を見学する

III 実習評価

実習評価表に基づき評価する

科目名	小児看護学実習	時期	3年次 前期・後期
担当者	看護師として5年以上の実務経験を有する専任教員	単位(時間)、日数	2単位(70時間)、11日間
科目の概要	健康な乳幼児の成長・発達に応じた日常生活の援助や、子どもを守り育てる環境について、2日間の保育園での実習から学ぶ。健康な学童期の成長・発達に応じての関わり方や学校保健の実際を1日間の小学校での実習から学ぶ。健康障害を持つ小児を受け持ち、成長・発達段階及び健康状態に応じた看護を通して小児とその家族に及ぼす影響について、看護過程を展開し学んでいく。		
目的	小児期にある対象とその家族を理解し、看護を実践するための知識・技術・態度を修得する		

I 実習目標・行動目標

実習目標	行動目標
1 健康な乳幼児の成長発達を理解し、保育の実際を説明する	1) 乳幼児の成長をはぐくむ為に必要な保育環境を説明する 2) 乳幼児の成長発達を説明する 3) 基本的な生活行動の自立状況から、援助のあり方を説明する 4) 発達段階における乳幼児のコミュニケーション方法を説明する
2 健康な学童の成長発達を理解し、学校保健の実際を説明する	1) 学童期の成長発達状況・健康問題を説明する 2) 学童期の小児の健康管理や健康教育活動を説明する
3 健康障害を持つ小児と家族を理解し、発達段階、健康問題にあわせた看護を実践する	1) 疾病経過・症状・検査・処置・治療を説明する 2) 出生時および成長発達の状況を説明する 3) 入院前後の生活状況及び入院・病気に伴う苦痛と適応状況を説明する 4) 患児の入院・病気に対する家族の理解と対処状況を説明する 5) 患児の入院に伴う家族への影響を説明する 6) 健康障害や発達段階に合わせたコミュニケーションを実践する 7) 患児・家族の気持ちを配慮した関わりを実践する 8) 患児にとって必要な観察ポイントをあげ、観察を実践する 9) 患児の健康障害のレベル・成長発達に合わせて健康回復への適切な援助を実践する 10) 患児の家族に対して適切な援助を実践する 11) 小児の特性を理解した看護技術を実践する 12) 小児病棟の構造・設備から、事故防止・感染予防対策を説明する 13) 病棟実習を通して自らの体験をふまえて学んだことを、引用・参考文献を用いて考察し、記述する
4 小児科外来の特徴と看護の実際を理解する	1) 治療・処置・検査の実際を見学し、必要なケアを説明する 2) 専門外来にて、通院治療を受けている小児・家族の疾病への取り組み方を説明する
5 NICUの特徴と看護の実際を理解する	1) NICUの概要を理解し、ハイリスク児の看護の実際を説明する 2) 家族への援助を説明する
6 看護専門職としての倫理観をもったふさわしい態度を身につける	1) カンファレンス等で意見交換をしながら、主体的に学習する 2) 対象や家族、医療スタッフへの影響や不利益を考慮し、看護職としてふさわしい行動・態度で実習に臨む。

II 実習構成

実習場所	実習時間(日数)	実習内容
学内	5H(1日)	オリエンテーション
保育園	13H(2日)	健康な乳幼児の成長発達と保育の実際を理解する
小学校	6.5H(1日)	健康な学童の成長発達と学校保健の実際を説明する
県立新発田病院(病棟)	32.5H(5日)	健康障害を持つ小児1事例受け持ち看護過程を展開する
県立新発田病院(小児科外来)	6.5H(1日)	小児科外来で行われる看護の実際を見学する
県立新発田病院(NICU)	6.5H(1日)	NICUで行われる看護の実際を見学する

III 実習評価

実習評価表に基づき評価する

科目名	母性看護学実習	時期	3年次 前期・後期
担当者	看護師として5年以上の実務経験を有する専任教員	単位(時間)、日数	2単位(70時間)、11日間
科目の概要	妊娠期の看護では、妊婦健康診査・保健指導を見学し妊婦の看護を理解する。 分娩期・産褥期・新生児期の看護では、産婦、褥婦、新生児を受け持ち身体的、心理的、社会的側面の看護を学ぶ。 看護過程を展開し看護実践を行うなかで、家族を含めた対象への母性看護を学ぶ。		
目的	妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期にある対象と家族を理解し、看護を実践するための知識、技術、態度を修得する		

I 実習目標・行動目標

実習目標	行動目標
1 妊婦と家族を理解し、妊娠期に必要な看護を説明する	1) 妊娠に伴う身体的変化を説明する 2) 妊婦の精神・社会的変化を説明する 3) 妊婦健康診査および保健指導の目的・意義を説明する
2 産婦と家族を理解し、分娩期に必要な看護を説明する	1) 産婦の身体的変化を説明する 2) 分娩各期および帝王切開術による身体的・精神的援助を説明する 3) 分娩室の設備・構造・環境の特殊性を説明する
3 褥婦と家族を理解し、対象に必要な看護を実践する	1) 産褥期の身体的変化を説明する 2) 褥婦の精神・社会的変化を説明する 3) 妊娠期・分娩期および産褥経過の情報を収集できる 4) 収集した情報を統合しアセスメントできる 5) 対象の母児を一体化して捉え、必要な看護を明確にする 6) 対象の個別性を踏まえた看護計画を立案できる 7) 計画した看護を対象のセルフケア能力を考慮し実践できる 8) 実践した内容を振り返り評価できる 9) 産褥期の指導を見学し目的・意義を説明する
4 新生児と家族を理解し、新生児期に必要な看護を実践する	1) 新生児の身体的特徴を説明する 2) 新生児に必要な看護・処置・検査・治療を見学し目的・意義を説明する 3) 胎児期・出生時新生児経過の情報を収集しアセスメントできる 4) 安全に配慮して看護技術を実施できる
5 母性看護の対象と母性保健について説明する	1) 母性看護の対象と多職種連携、看護の機能について説明する 2) 母性保健に関連する地域の社会資源について説明する 3) 病棟実習を通して自らの体験をふまえて学んだことを、引用・参考文献を用いて考察し、記述する
6 看護専門職として相応しい態度で実習に臨む	1) 対象や家族に対し思いやりと責任ある態度で関わる 2) 倫理的態度で実習に臨み、必要な報告・連絡・相談を行う 3) 主体的に実習に取り組み、メンバーシップを発揮する

II 実習構成

実習場所	実習時間(日数)	実習内容
学内	5H(1日)	オリエンテーション 看護技術演習 病棟、産科外来オリエンテーション(実習指導者)
県立新発田病院(産科外来)	6.5H(1日)	妊婦健康診査・保健指導を見学 妊婦とコミュニケーションを図る
県立新発田病院(新生児室)	6.5H(1日)	新生児の看護・診察・処置・治療を見学
県立新発田病院(病棟)	6.5H(1日)	助産師に同行し妊娠期・分娩期・産褥期看護を見学
県立新発田病院(病棟)	39H(6日)	褥婦・新生児を受け持ち、看護過程を展開し看護を実践
学内	6.5H(1日)	演習 まとめ

III 実習評価

実習評価表に基づき評価する

科目名	精神看護学実習	時期	3 年次 前期 後期
担当者	看護師として 5 年以上の実務経験を有する専任教員	単位(時間)、日数	2単位(70 時間)、11 日間
科目の概要	精神科病棟に入院中の患者との対人関係を発展させ、その振り返りを行うことで、対象理解や状況理解だけでなく、対人関係における自己の傾向を知る。 地域で生活する障害者の社会参加の実態に触れることを通して、精神障害者の地域における生活支援についての理解を深める。		
目的	精神に障害のある対象とその家族を理解し、看護を実践する知識・技術・態度を修得する。		

I 実習目標・行動目標

実習目標	行動目標
1 保健医療福祉チームの一員として、精神に障害をもち入院している対象の人権擁護と看護師の役割について理解する	1) 病院や病棟の治療的環境が対象に及ぼす影響について述べる 2) 対象の人権を守るための看護活動について、精神保健福祉法に関連づけて述べる 3) 精神科における多職種連携のメンバーとそれらの看護師の役割について述べる
2 精神に障害をもち入院している対象の健康問題を把握し、必要な援助を実践する	1) 対象を身体的側面から説明する 2) 対象を心理的・社会的・文化的側面から説明する 3) 治療内容と関連させながら身体的側面から分析する 4) 発達段階と関連させながら心理的・社会的・文化的側面から分析する 5) 収集した情報を互いに関連づけて説明する 6) 分析結果を統合し、看護課題と個別性のある看護目標を設定する 7) 対象に応じた個別性のある看護計画をタイムリーに立案し、必要時は追加・修正する 8) 対象の対人傾向にあわせた援助をタイムリーに安全に実践する 9) 目標達成状況や援助内容を客観的に評価し、必要時は修正する 10) コミュニケーション技法を活用し、治療的かかわりを考えたコミュニケーションがとれる 11) 精神看護学実習における自己の学びについて文献を活用しながら具体的に述べる
3 対象との関わりを通して自己の内面的変化に気づき、自己洞察する	1) 対象の言動と自分の言動を、プロセスレコードを通して振り返ることができる 2) 自分の思考や感情の傾向に気づき、考察する
4 精神に障害をもちながら、地域で生活している人に必要な支援について理解する	1) 地域における支援事業の役割と、関わる人びとの役割や活動内容について述べる 2) 利用者の生活環境や利用している社会資源について、障害者総合支援法に関連づけて述べる 3) デイケア利用者の目的と意義、かかわる人びとの役割について述べる
5 看護専門職としてふさわしい態度を身につける	1) 適切にスタッフや教員と報告・連絡・相談をおこない、チームの一員として行動する 2) 事前学習や追加学習を活用し、主体的に実習に取り組める 3) 自身の健康管理をおこない、記録の提出期限をまもる

II 実習構成

実習場所	実習時間(日数)	実習内容
学内	5H(1日)	オリエンテーション
県立新発田病院(病棟)	4.8H(7.5日)	1事例を受け持ち、看護過程を展開する
県立新発田病院(デイケア)	4H(0.5日)	デイケアに通う精神障害者とスタッフの関わりを見学する
障害福祉サービス事業所	6.5H(1日)	事業所に通う利用者と共に活動を実施し、地域生活支援の実際を見学する
学内	6.5H(1日)	精神障害者の人権擁護と多職種連携における看護師の役割についてグループワーク

III 実習評価

実習評価表に基づき評価する

科目名	統合実習	時期	3年次 後期
担当者	看護師として5年以上の実務経験を有する専任教員	単位(時間)、日数	3単位(105時間)、14日間
科目の概要	本実習は、専門分野の臨地実習における最終段階として位置づけ、医療チームにおける安全で効果的な看護を提供するために必要な様々な看護マネジメント(看護管理、医療安全、倫理的視点、時間管理等)の実践を学ぶ。また、多職種との連携について理解を深める中で専門職としての看護実践のあり方や自己の課題を明らかにする。		
目的	対象の健康と生活を支援する医療チームの一員として、知識、技術、態度を統合した看護専門職として必要な看護実践能力を修得する		

I 実習目標・行動目標

実習目標	行動目標
1 複数受け持ちを通して、多重課題における臨床判断及び看護の優先順位・時間管理を踏まえた援助を実施する	<ol style="list-style-type: none"> 1) 多重課題における看護師が行っている看護の優先順位の判断について、その根拠を説明する。 2) 看護師の臨床判断に基づく看護について説明する。 3) 複数受け持ち患者の看護に必要な情報を優先順位を考えながら収集する。 4) 複数受け持ち患者に必要な看護を優先順位・時間管理を考慮し計画している。 5) 科学的根拠に基づき安全・安楽・自立に配慮しながら個別的な看護を実践している。 6) 患者の反応をとらえながら、その日の状況に応じた適切な看護を見出し、優先順位とその対象へのケアの時間配分を、根拠をもとに考え実践している。 7) 実施結果を報告すべき優先順位を判断し、系統的・客観的かつ簡潔に報告する。 8) 日々の看護実践から、主観的・客観的情報を収集・分析し、系統的にSOAP形式で記録し、看護実践を評価している。 9) 計画の追加修正を適宜行い、最終的に実施した看護を客観的に見つけ批判的かつ論理的に吟味して看護を評価する。
2 病棟における医療安全管理体制と具体策を理解し実践する	<ol style="list-style-type: none"> 1) 組織における医療安全管理体制の実践について説明する。 2) 看護師が行っている医療安全の視点を説明する。 3) 医療安全の視点から具体策を考え、看護実践している。
3 病棟における看護管理の実践を理解する	<ol style="list-style-type: none"> 1) 看護ケア・看護サービスの管理について記述する。 2) 組織の一員としての看護マネジメントについて自己の学びを述べる。
4 看護チームの一員としてのリーダーシップ及びメンバーシップについて理解する	<ol style="list-style-type: none"> 1) チームにおけるリーダーシップの役割と必要性を説明する。 2) チームにおけるメンバーシップの役割と必要性を説明する。
5 地域連携・及び専門職種間連携の実践を理解し、保健・医療・福祉チームにおける看護の役割を理解する	<ol style="list-style-type: none"> 1) 保健医療福祉チームの連携場面から看護の役割を説明する。 2) 看護実践から看護専門職としての役割を説明する。 3) 患者サポートセンターの設置背景・役割・機能を理解し、継続看護の必要性について事例から考察する。
6 専門職として倫理的指針のもと行動し、看護者としての自己の課題を見出す	<ol style="list-style-type: none"> 1) 看護職の倫理綱領を考えながら看護実践し省察する。 2) 同行や看護実践場面をもとに、文献を用いながら自己の看護観についての考えを示す。 3) 対象への安全・安楽・倫理に配慮した看護実践に向けた知識・技術・態度を修得する機会を主体的に求める。 4) 主体的に思考・判断し行動する中で自己の課題を見出す。

II 実習構成

実習場所	実習時間(日数)	実習内容
学内	5H(1日)	オリエンテーション
県立新発田病院(病棟)	75H(10日)	看護管理、医療安全、倫理的視点、医療チームとの連携 複数受け持ち、優先順位
患者サポートセンター(学内)	4H(0.5日)	保健医療福祉の連携、継続看護の必要性(講義、GW)
患者サポートセンター(新発田病院)	7.5H(1日)	保健医療福祉の連携の実際、継続看護の理解
学内	13.5H(1.5日)	まとめ

III 実習評価

実習評価表に基づき評価する